

# 研究

RESEARCH

## 「アートとしての音楽」の 学びに関する考察

愛媛大学准教授  
石塚 真子

はじめに

本研究は、緒についたばかりの萌芽的なものではあるが、3年間継続して行ってきたプロジェクト研究を基に、「アートとしての音楽」の学びにおけるコミュニティのあり方について提案する。そのことよって、「アート」と社会との関係を見つけたし、社会の調和において「アート」が果たす役割について浮き彫りにすることができる。そこで、本論では、学校教育のみならず生涯音楽学習も視野に入れて、「人」や「人びと」の「生」に立脚した教育実

践について検討する。

### 1 「アート活動」に関するプロジェクトについて

(1) 「アートでつながる社会・大学・教育をめざす実践的プロジェクト研究」<sup>1)</sup>

このプロジェクトは、2011年度に、愛媛大学教育学部の専修コースの枠や教員養成群・生涯学習群の枠を超えて、広義のアートの概念<sup>2)</sup>のもとに、教員と学生とが協同しながら一連の企画を行ったものである<sup>3)</sup>。その目的は、2011年3月に起こった東日本大震災・原発災害以後、私たちをと

りまく社会や大学という教育の場が大きな岐路に立たされているという共通理解のもと、災害の経験我希望へとつないでいくために、被災地の関係者と連携しながら、「未来へと共に生きるつながり」をつくる「アート活動」を行うことである。

このプロジェクトでの活動を通して、「人間らしく生きるとはどのようなことか」、「私たちはどこへ行くのか」等々の根本的な問いを深く考える契機を得ることができた。

(2) 「アートルink理念に基づく研究資源の充実とそれを活かした教育実践」<sup>4)</sup>

前年度のプロジェクトを継承しつつ、2012年度も、愛媛大学教育学部の教員と学生とが、各々の持つ研究資源や教育方法などを持ちより、協同しながら、次世代へとつながる創造的な教育実践を行うために、「人の生活と存在に根ざすアート」活動にとり組ん

だ<sup>5)</sup>。

特に、ワークショップ「芸能でつながろう!」では、今別荒馬(青森県)において、「荒馬」と「手綱取り」の心地よい距離感をどのように築くのか、「人と人とのつながり」にスポットを当てて行った。そのようにとり組むことで、「人の生活と存在に根ざすアート」としての「今別荒馬」へのアプローチ方法について提案することができた。

(3) 2つのプロジェクトを通して見出されたこと

これまでの日本における「芸術教育」では、美術で美術を教え、音楽で音楽を教え、演劇で演劇を教えてきた。しかし、「アート」を「人の生活と存在に根ざすもの」と捉えるならば、それぞれのジャンルに即した「アートとしての美術」、「アートとしての音楽」、さらにはジャンルの枠を超えた「アート活動」がある。また、音楽は音楽で、美術は美術で、演劇

は演劇で：…などのように各ジャンルに閉ざして議論することで独自性は高まるが、そのことで閉塞状況も生みだしているといえる<sup>6)</sup>。加えて、今日、「アート」による教育は、学校カリキュラムの末端に追いやられ、授業時間数も削減されている。このような現状は、子どもの生活における「アート」との接点まで失わせてしまう可能性があるだろう。

この2つのプロジェクトから、「日常生活をおくる上での根源的な活力」としての「アート」という新たな意味の創出と、「アート」を通じたコミュニケーションのあり方、さらにはコミュニケーションのあり方について研究する必要性が見出された。そしてそれは、学校教育における「アート教育」にも示唆を与え、さらには、新しい人間生活の創造にもつながると考えられる。

## 2 「文化的平和」を視点としたプロジェクトについて<sup>7)</sup>

続いて2013年度は、「アトリンク」を包括する概念としての「文化的平和」に着目することで、より広範な共同研究への展開をめざした。具体的には、長崎における連携フィールド調査を通して、各々の専門領域に沿った研究内容を「文化的平和」理念<sup>8)</sup>に基づく教育実践モデルへと接合させることを試みた。

以下、拙論を基に述べる<sup>9)</sup>。平和教育のあり方については、つぎのような歴史的変遷とともに、その理念や方向性も包括的に開放的なたちで考えられるようになってきた。1970年当初は、社会科学もしくは歴史・公民分野の枠組み内で論じられる傾向があったが、1990年代から、広汎な人文社会科学や自然科学の知見と結びつきながら検討されるようになってきた。さらに、近年では、「自然科学教育と平和教育」「ア

ト・身体と平和教育」など、多様な側面から平和教育の可能性が論じられている<sup>9)</sup>。

戦後日本の教育界においては、平和教育の積極的な広がりが見られるようになったのは1970年代のことである。広島・長崎の被爆体験や沖縄戦・東京大空襲など各地の戦争体験の継承を中心とする平和教育の実践が行われ、それと並行して平和教育の理論やカリキュラム・教材開発などが進められるようになったのである。これらは、戦争と平和の問題を教育の素材として扱っているという意味において、「平和についての教育 education about peace」と呼べるものであった。その後、1990年代になると、平和な社会・世界の形成者を育てることを目的とした広義の平和教育、すなわち「平和のための教育 education for peace」が理論的・実践的課題として浮上してきた。これは、先述の包括的な平和概念を礎石として新たな教育の方向性を模索したものと見える。さらに近年、教育のあり方そのものも平和的であるべきという観点に基づいて、「平和の中での教育 education in peace」という概念も示されるようになった<sup>10)</sup>。

### (1) 「民俗芸能」から長崎を読み解く

筆者はこれまで「囃す・囃される」という関係性から民俗芸能の特徴について考察し、芸能を理解するために対象地域の風土や歴史文化を調査してきたが、本研究では「民俗芸能」から対象地域の文化の特質を探ってみた。調査の対象である「長崎くんち」については、2011年の調査に加え、今回は「文化的平和」という理念から捉え、さらなるフィールド調査、文献研究等に基づき、その学習材としての可能性について検討した。

「長崎くんち」は、諏訪神社（長崎市上西山町）の秋の例祭で、踊町は7年に一度の輪番制で演し物を奉納する<sup>11)</sup>。「長崎くんち」の各踊町の奉納踊は、「龍踊」（籠町）、「オランダ船」（江戸町）など中国やオランダ文化等との異文化融合をはたし、踊町独自の演し物に成長してきた。長崎には華人や西洋の影響のもとに独特の文化が醸成

されていることがわかる。また、江戸時代、貿易品の流通のため全国と交流があり、「太鼓山」は堺(淡路)から、「鯨の潮吹き」は唐津から伝わったといわれている。これらのことから、「長崎くんち」を基点として、関連する日本の郷土芸能や中国やオランダ等の諸外国・諸民族の音楽文化の学習へと展開することができる<sup>12)</sup>。

さらに、本研究において、「長崎の証言の会」の森口貢氏への、同会のこれまでの活動に関する聞き取り調査に同行した際、森口氏から「戦後、焼野が原に籠踊が来た時には感動した。戦争が終わったのだと思った。」ということを知った。また、その後の調査により、長崎新聞に、原爆で壊滅した浦上地区で「長崎復興祭」(1946.11)が開かれた記事があり、

森口氏の記憶と重なる事実を確認することができた<sup>13)</sup>。

「長崎くんち」の踊町は、原爆投下や二次火災で全町域消失が18町、一部消失11町、ほとんど全町

を建物損壊で失った町を加えると、踊町79町のうち半分近くの町が被災したと言われている<sup>14)</sup>。しかしながら、戦後初の奉納踊は、1945年10月7日に行われている。その後も、昭和30年代、40年代には存続の危機が幾度となくあったが、踊町の人々はそれを乗り越えて伝統を継承してきた<sup>15)</sup>。これらのことから、「長崎くんち」が人間に生きる力を与え、人びとをつなげてきたこと。踊町の心意気によって伝統が継承されてきたことがわかる。

さらに、「長崎くんち」は、植木行宣が「長崎くんちの最大の特色はまさにその生きた練物の祭りであり続けたところにあるのである。」<sup>16)</sup>と述べているように、踊町は、7年毎に趣向を替えて見物人を楽しませている。このことから、「長崎くんち」に内在する、風流における今を生きる伝統のあり方<sup>17)</sup>について学ぶことができる。

## (2) 長崎での連携フィールド調査を通して見出されたこと

筆者らは、一連の研究教育実践を通じて、各々の専門領域に関する研究を深化させるとともに、教育という営みの方向性についても重要な考え方を共有することができた。その一端を示すとすれば、

理念としての「文化的平和」を教育の実践的な場面において具象化して考えようとするとき、「人」あるいは「人びと」の「生」に立脚することの重要性が挙げられる。そしてそれは、抽象的に思い描く遠くの対象ではなく、「人」や「人びと」の中に内在するものであると考える。それを引き出しながら実践することが、「平和のための教育 education for peace」や「平和の中での教育 education for peace」にほかならないという考えに至った。

音楽科の授業においては、芸能から音・音楽のみをとり出して学習する事例が多いが、芸能・音楽を演ずる・演奏する「人」にスポ

ットを当てた民俗芸能の授業づくりについて研究を進めていくことが重要なのではないか。文化として音楽を捉えたならば、民俗芸能に限らず、すべての学習材に共通する考え方であろう。

## 3 学びのコミュニティについて

「アート」の活動からは、「アート」を通じたコミュニケーションのあり方、さらにはコミュニティのあり方について、「文化的平和」の長崎における連携フィールド調査からは、教育実践のあり方についての視座が得られた。

これまで筆者は、「囃す・囃される」関係性を視点として民俗芸能の調査を行ってきたが、筆者が調査している祭りにおける共同体においては、価値観が異なるものが協同しながらコミュニティを形成する場面を幾度となくみてきた<sup>17)</sup>。このような異文化理解について、八木正一は、「異質なものととの関係性の中でのことが発展的に生まれるといった認識をいか

に経験的に獲得させるか<sup>18)</sup>と述べている。学びのコミュニティにおいて、他者と相互関係を構築していくときに、異なる価値観の人と出会い議論を重ねることで、ものが発展的に生み出されていくことに喜びを感じ、そのようなことができるような教育環境や活動を用意することが必要なのではないであろうか。

「心を一つに」といった価値観を一つにする方向でのコミュニケーション能力とともに、これからの時代には、一人ひとりの異なる価値観を認めながらコミュニティを形成していくことのできる能力が求められているのではないかと考える<sup>19)</sup>。

「文化的平和」理念を礎石とする筆者らの教育実践は緒についたばかりであるが、この理念は、教育という営みの本質的な理念とも重なり合っており、同時に、音楽の学びにおいても教育実践のあり方を考える上でも、有効な視座を

提供するものといえよう。

(註)

- 1) 2011年度愛媛大学教育学部・地域連携プロジェクト支援経費「アートでつながる社会・大学・教育をめぐす実践的プロジェクト研究」(研究代表者・石塚真子、他4名)
- 2) ここでの「アート」とは、芸術文化のみならず人文社会科学・教養・教育学などの領域も含んでおり、人間らしい生き方や未来の社会を構想するうえで重要な鍵を握る概念と捉えている。また、「アートルインク」とは、広義のアートを媒体として人簿との間に豊かなコミュニケーションをもたらしそうとする営みを指し、いわゆる「芸術・体育系」の領域の枠内にとどまらず、現行の総合人間形成課程やリベラルアーツ(自由学芸)の理念とも接合しているという特質を持つものと考えている。
- 3) 「ART LINK PROJECT」(震災の記憶をつむぎ 共に学び 未来へとつながる)をテーマとして、民俗芸能公演・ワークショップ、ドキュメンタリー映画上映会を行った。
- 4) 2012年度愛媛大学学部 教育学部 学術研究助成「アートルインク理念に基づく研究資源の充実とそれを活かした教育実践」(研究代表者・石塚真子、他3名)
- 5) シンポジウム「ART LINK PROJECT 震災の記憶をつむぎ 共に学び 未来へとつながる2012」および民俗芸能のワークショップを行った。
- 6) 佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む・アート教育の思想と実践』、東京大学出版会、2001年、p.23。本論では、佐藤学の用語を使用しているが、その用語の意味する内容は、若干異なっている。
- 7) ここでの「文化的平和」とは、人間の生活や感性、人びとのつながりを重視し、それらに根ざす豊かな文化を継承・創出することを通じて、文化的暴力を低減・排除し、平和的な人格の形成と平和的な社会の構築をめざす理念と捉えている。この理念は、教育という営みの本質的な理念とも重なり合っており、そのため教育実践のあり方を考える上でも有効な視座を提供するものと考えている。2013年度愛媛大学学部 教育学部 学術研究助成「領域横断型フィールド調査に基づく「文化的平和」の理念に関する教育実践研究」(長崎から「人間の復興」を考える) (研究代表者・矢沢知行、他3名)
- 8) 矢沢知行、他『「文化的平和」の理念に関する教育実践研究』(長崎フィールド調査と公開セミナーを通して)、「愛媛大学教育実践総合センター紀要」、2014年(2014年7月発行予定)
- 9) 竹内久頭編『平和教育を問い直す』、法律文化社、2012年
- 10) 詳細については、前掲8)を参照。
- 11) ここでは、2013年の踊町7町の「奉納踊」を諏訪神社で、「庭先回り」については長崎市において取材を行い、他の踊町については、長崎伝統芸能館にて調査を行った。
- 12) 日本の郷土芸能、中国やオランダ文化との関係については、森田三郎「長崎くんち考―都市祭礼の社会的機能について」『季刊人類学』第11巻第1号、1980年や笠原潔「江戸時代の日本で歌われたオランダ歌曲について」『放送大学研究年報』第21号、2003年などを参照。
- 13) 2012年10月7日、長崎新聞。共同研究者の福田喜彦の調査による。
- 14) 詳細については、太田由紀「長崎くんち考」、長崎文献社、2013年、pp.149-159を参照。
- 15) 前掲14)、p.189。このことについて、太田由紀は、「江戸時代から、自治組織で運営してきたことが、底力となって知恵や工夫が生まれてきたと思われる。」と述べている。
- 16) 植木行宣『山・鉾・屋台と囃子』、白水社、2001年、pp.23-23
- 17) 牛頭天皇祭(東京都三宅島)、荒馬まつり(青森県)、水口曳山祭り(滋賀県)など。
- 18) 八木正一「異文化理解と音楽学習―他者との関係性構築の視点から―」、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科芸術系教育講座音楽教育学研究室「音楽教育学論文集 第2号」、p.66
- 19) 平田オリザは、このことについて「この新しい時代には、バラバラな人間が、価値観はバラバラなままで、どうにかしてうまくやっていく能力が求められている。」と述べている。平田オリザ『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か―』、講談社現代新書、2012年、p.207